今泉恂之介著『伊那の放浪俳人　井月（せいげつ）現る』

和田律子

法学部元教授今泉恂之介先生が『伊那の放浪俳人　井月（せいげつ）現る』を刊行された。本書は、幕末から明治初期にかけて信州伊那を中心に活動した俳人井上井月（一八二二〈文政五〉～一八八七〈明治二十〉、六十六歳）の俳人としての後半生を辿っているが、単なる個人の評伝ではなく、井月をとおしての十九世紀の俳壇史認識の再検討を目指した俳壇史論文芸論である。

その中心は井上井月という世にあまり知られていない地方の俳人であり、時代は近代俳句の改革者として名高い正岡子規登場前夜にあたる幕末明治のことであった。

著者今泉恂之介氏にはすでに好著『子規は何を葬ったのか』（新潮選書、二〇一一年）がある。そこでは、近代俳句の改革者正岡子規によって前時代―幕末・明治初期―の俳句が「卑俗陳腐」「月並調」で低レベルのものと批判された結果、幕末明治初期は俳句が最も堕落した時代としてひとびとに顧みられず、小林一茶以降正岡子規登場に至る百年が俳句史における「空白の百年」であることが常識となった経緯が詳細に示されてい

る。しかし、著者は、正岡子規によって提示された俳句史における「空白の百年」は、果たしてほんとうに低レベルの俳句しか出てこなかった時期なのかと、同書において疑問を投げかけられた。同書は、俳句俳壇史研究、引いては幕末以降近代文学史再検討に一石を投じた、示唆に富む一書であった。

本書は、『子規は何を葬ったのか』で提示された疑義に著者自らが答えたものである。

著者は、子規が批判した幕末明治初期―俳句が堕落した時代―に活躍した俳人井上井月の事績を丹念に辿り、当時の俳人たちの作品が子規が断じたような「卑俗陳腐」で低レベルなものではなく、現代までつづく芭蕉の教え（「蕉風」）を受け継ぐ正統的な作品が多く作られていたこと、それは子規が提唱した「写生」の句に通づるものであること、井月は当時にあって蕉風をきちんと学び、蕉風を継承し伝統的な俳句を作り続けた句作の第一人者であり、蕉風を伝える良き指導者であったことを検証された。子規によって一刀両断のもとに切り捨てられた幕末明治初期の「卑俗陳腐」な句ばかりの「俳句空白の百年」は、けっして「空白」ではなく、井月の拠点であった信州伊那をはじめ、江戸でも京都でも他の地方でも、じつに多くの俳句愛好者たちが芭蕉以来の伝統的正統的句作をおこなっていた時代であった。「月並俳句」ばかりが強調されるこの時代だが、芭蕉研究が進み古典漢籍研究も前後の時代に劣らず盛んな時代であった。このような状況を、著者は多くの資料を縦横無尽に駆使して洗い出し、井月の俳人としての活動をほぼ編年体で辿り、俳句史の「空白の百年」の見直しを迫った。

今後の文学史俳壇史研究は本書の存在抜きには論じられないであろう。本書の最大の功績である。

以下に、目次を掲げ、その中から井月と当時の俳壇史についての本書の特徴をいくつか具体的に紹介したい。

序　章　井月が復活するまで

第一章　伊那谷に現れた侍
第二章　二つの序文
第三章　京都の宗匠たち
第四章　五律という俳人
第五章　二人の接点
第六章　大江戸の雰囲気
第七章　尾張に蕉風王国
第八章　春ばかりの謎
第九章　象潟へいったのだろうか
第十章　四徳の物語
第十一章　老いても祐筆
第十二章　「余波の水くき」
井上井月二百句（ＮＰＯ法人双牛舎選）
巻頭口絵に井月像、伊那の風景等（以上、写真）、「井月・伊那の足跡」（地図）
巻末に、井月年譜、参考文献

著者の説明によれば、現在に至るまでずっと、井月は信州伊那地方では有名な俳人で市民のあいだにも名前は浸透し、「せんげつさん」と呼ばれて愛され、井月研究のすぐれた成果も発表されているとのことである。井月研究は脈脈として続けられてきた。しかし、そうした研究は主として信州の「伊那の中の井月」という視

点で、地元の方々によってなされてきたものであった。それに対し、著者はいわば外部から井月に迫り、信州における活動とともに、伊那地方以外での井月の優れた活動の実態をも検証された。これは井月研究史上画期的なことであった。

井月は後半生を伊那で過ごしたが、その間、四十歳頃、江戸・京都・奥羽方面への旅をしている。各地で土地の俳句の中心人物たちと会い、俳句を集めていたらしい。そして、伊那に帰ってからそれらを句集『俳諧三部集』としてまとめたという。著者はそのなかに残された各地の俳人俳句を丹念に追い、現在にいたるまで知られることのなかった当時の日本の俳壇状況の具体相を明らかにされた。江戸や京都にいかに多くの市井の優れた俳人たちがいたか、いかにかれらが芭蕉の風を慕い、継承しようと努力していたか。著者はそれらを人物考証作品分析を絡めて具体的に詳細に解明している。本書の圧巻といえる部分であるし、研究上の功績もきわめて大きい。指摘された興味深い事例は枚挙に暇がないが、一例を紹介したい。

作家永井荷風の曽祖父永井士前は尾張鳴海の俳人として全国的に名の知られた人であった。鳴海を訪れた井月は士前たちと句会で同席したのではないかと、鳴海の実地調査を含めた緻密な資料分析をとおして著者は推測する。そして、士前の句についても、「現代の句の中に置いても「正統的な句」に分類される」と、当時の俳句の水準の高さを指摘される。

このように、伊那以外でも全国で高い水準の俳句が作られていたことが、井月の収集した句集「俳諧三部集」の存在とそれを丹念に調査分析した著者の尽力によって明かになった。この部分は著者がもっとも強く主張される部分であり、本書の核をなす部分である。

また、井月個人についてみると、著者が指導者としての井月を高く評価していることが注目される。井月死去ののちのことだが、井月の句の収集家が、俳句にも非凡な才を発揮していた芥川龍之介に井月の句を紹介し

批評を求めたことがあったという。芥川は井月の作を絶賛し、代表句を選んだ。しかし、収集した句の中には井月の弟子の句も多く混入しており、芥川が選んだものも弟子の作品だった。弟子の句の混入が発覚したのは芥川の死後であったという。このエピソードをあげて、著者は、一部で言われている師匠井月より弟子たちのほうが力量があったのではないかとの説を退け、弟子たちの句を丁寧に添削指導していた井月の行動を示す資料も提示したうえで、師匠の句より優れた句を作る弟子たちを育てた「井月の指導力」を評価される。弟子たちは井月を慕い、井月の死後、井月の句碑を芭蕉の句碑のそばに建立したという。このような事実を掲げながら、著者は井月のすぐれた指導者としての側面を指摘されるのである。井月研究の新しい視点であろう。

ところで、本書には井月の句をはじめ多くの俳句が紹介されているが、その多くに著者による注記が付されている。俳句に馴染みの薄い読者にも理解しやすいようにとの著者の配慮が感じられる。これも本書の特徴のひとつであろう。

さらに、注記にときどきお名前があがっている「大澤水牛（すいぎゅう・俳号）」氏の存在も本書の特徴の重要な部分であろう。著者が「あとがき」の最後に「鉄壁のゴールキーパー」としてお名前を掲げる本書の監修者大澤水紀雄氏である。難解な句の注記で、典雅な句風の著者とは趣きを異にする洒脱で俳味ある解を提示され、二つの解を比較して読むことをとおし、読者に読解の難しさと楽しさを教えてくださっている。

著者は大澤氏とふたりで俳句振興のためＮＰＯ法人「双牛舎」を創設し、俳句振興に尽力されている。著者は、井月のような埋もれた存在の俳人を現代に甦らせ、俳句史の見直しを精力的に推進されるが、それも、俳句を愛し、俳句の普及振興に使命感を抱く而雲（じうん・著者の俳号）・水牛両俳人の阿吽の呼吸によって初めてなされたことだと思われる。巻末に掲載された「井上井月二百句」（注記付き・ＮＰＯ法人双牛舎選）もそのような眼でみると一層興味深く、本書の特徴のひとつに数えることができよう。

最後に、本書のもうひとつの大きな特徴と思われることを述べておきたい。

個人的なことで恐縮だが、著者と稿者は本学着任が同年の、いわば同期生である。そのご縁もあり、親しくさせていただいてきた。もう五・六年も前のことになるだろうか、国会図書館近くでばったりお会いしたことがあった。江戸期の俳書を調べていますとのお話だった。思えば、そのときすでに御著書執筆に向けての地道な作業にはいっていらしたのであろう。本書には貴重な資料がふんだんに用いられ、綿密な考証が施されている。そして、本書からもその一端を窺い知ることができるが、著者の資料調査の方法は多岐にわたり、かつ徹底している。インターネットを駆使し、国会図書館、都立中央図書館等に足繁く通い、伊那、鳴海等各地の教育委員会、資料館等関連機関に問い合わせ、実際に出向き、伝手を頼って個人を訪問し、実地踏査を行なう、という具合である。その努力の賜物が井月を大切に思う人の縁につながっていく。著者はそれを偶然の幸運とさらりと記すが、偶然ではないと稿者は考えている。

著者は、本学教授就任前は、長く新聞記者として活躍され、「春秋」（日本経済新聞）欄等も担当されてきた方である。身に染み込んだ現場主義、事実確認の手法、労を厭わぬ行動力等、著者の経歴に因する取材力。ジャーナリストとしての見識と経験が本書の至るところでさまざまな形で遺憾なく発揮されている。「幸運」な人の縁の広がりもその延長線上に位置づけられるということになろうか。

しかし、それだけではないのではないか。著者は、広く深い知見にもとづいた明晰で魅力的な話術の持ち主である。天性の「談話の才（ざえ）」とでもいえばよいのであろうか。その、つい引き込まれてしまうようなお話し振りは、とくに俳句を語る時に一段と冴えをみせる。本書の調査に関連して著者に出会った多くの方々も、俳句と井月を深い愛情をもって語る著者の「談話の才（ざえ）」に魅了され、自ずと貴重な話が引き出され、人から人へと人脈がつながり、得られた情報がさらなる成果へとつながっていったのではあるまいか。

「幸運」の連鎖は、本書の特徴であり大きな魅力であろう。

「序章」の最後で、著者は本書タイトルに触れ、「「井月現る」には、「新たな井月、現る」の意味が込められていることを、ご理解いただきたい」と記された。

この一文が著者の思いを端的に表しているであろう。

井月の生きた時代は、蕉風を継承する豊穣な句作活動が全国で行なわれていた時代であった。井月の生きた時代は子規によって批判された文学史上から忘れ去られた時代などではなく、もっとも堕落した時代でもなかった。その重要な事実が本書によって証明されたのである。「新たな井月」はたしかに「現」れたといえよう。

近年、井月の注目度は急速に高まりを見せている。映画「ほかいびと　伊那の井月」の上映（北村皆雄監督、二〇一一年）、岩波文庫『井月句集』の刊行（二〇一二年）等。二〇一四年には東京で「井月忌俳句大会」が開催されたが、予想を大きく上回る参加者があったという。井月は埋もれた存在から現代に甦ったことが実感される事例の数々である。

本書の功績に改めて思いを至したい。

井月のつぎは、著者の手によってどのような人物が新たな姿を現してくれるのだろうか。その日を楽しみに待ちたいと思う。

同人社　二〇一四年八月　一六〇〇円